

日本書紀傳

九卷上

十六

書牙
一〇五二二號

内閣文庫			
番號	和	10522	
冊數	156 (25)		
函號	特	85	1



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



教部省
文庫印

日本書紀傳九

一第

日本書紀傳九之卷

神代卷第七

四神出生章

穗積重胤

謹撰

一書曰

伊弉諾尊曰吾欲生

御宙之珍子乃以左手持白

銅鏡則有化出之神是謂大

日靈女尊右手持白銅鏡則有

○日本書紀傳九

○一

化出之神是謂月弓尊又廻
 首顧眄之間則有化神是謂
 素戔嗚尊即大日靈尊及月
 弓尊並是質性明麗故使照
 臨天地素戔嗚尊是性好殘

害故令下治根國珍此云于
 圖顧眄之間此云美屢摩沙
 可利爾

此一書ハ第六一書又古事記の御身降殿の異傳あり
 此珍子等ハ二神の生成給ふ所ありを此ハ伊弉冉尊
 の御事ハ無一ト伊弉諾尊一柱の御事ト為リ又左
 手持白銅鏡云々右手持白銅鏡云々ト云るも第六一

書の洗左眼云々復洗右眼云々有る傳の異あり
御鎮座傳記に神代天御中主神所授白
銅鏡云々三才三面之内一面是也今二
面者天鏡尊子天萬傳持之次沫蕩尊次伊弉諾伊弉
冊尊傳持天神賀吉詞白賜之神日月神所化乃真經津
鏡是也有上偽造の妄説也七代章あり一書
此を借字して白銅鏡と謂ふ非ず天鏡尊
傳五卷十丁下云をに見て明む可し
を阿米能志多志良須と訓る其宜し正書何不生天
下之主者歟云々可以君臨宇宙有ると同し事あり
あり通證小御宙舊事紀作御宙纂疏本作御宙字書
宇御宙字出文之見えたり御字ハ名義抄ハ袁佐宇又
選注御天下也一書ハ都加佐杼流あり有て取同
の取を志良須と訓る其小同ト取極遠之國○珍子古

事記あり此の事を吾者生る子而於生終得三貴子と
有る三貴子を記傳七丁小美邊斯羅能宇豆能美古と
訓りたる其説小云々書紀一書吾欲生御宙之珍子と
有て訓注小珍此之干圖と有て此の三柱大神成出生
し神武天皇御卷小珍彦此之干磐昆古と有り又大
殿祭詞小皇我宇都御子皇御孫之命と有り借宇豆ハ
師説小高く嚴くし事ありと有て今言小人の容貌
を宇豆高きと云も克叶へり万葉六二十丁小天皇朕字
頭乃御宇以又諸祝詞小宇豆乃幣帛ありと有り取
云水たるか如し名義抄小珍字を多迦良又米豆良志

又宇流波志又多布登夫々訓之貴字を多布登志又多
 迦志又阿氏夜迦那理あども有を合て珍子の義を思
 不可一又宇都小憐愛一玉意も有て此
 ありあり講義大殿祭詞神賀詞の下例あり此事祝詞
 通證小玉篇珍貴也美也重也有り珍字米豆良志と
 訓る神功皇后御紀小因以舉竿乃獲細鱗魚時皇后曰
 希見物也と有る下小希見此云梅豆羅志と見え古事
 記朝倉宮段小今日得道奇物あど有る此ハ尊むわて
 ハ無く物を愛る方あれども其義一ハ歸り継體天
 皇御紀歌小梅豆羅古杖駄捧と有ハ目類子之云人名
 あれども万葉十六小母尔奉都也目豆兒乃負父尔歌
 都也身女兒乃負と有る目豆兒ハ珍子貴子共ハ愛く
 る可一但此等ハ傍証あれども珍子貴子共ハ愛く
 むと又愛る意有を知しめむとて叢脞ハ於投棄左
 ○左午云し右午云しの事ハ古事記御身ハ於投棄左

御午之午纏所成神名云し次於投棄右御手之午纏所
 成神名云しと有より混ハ又洗左御目時所成神名天
 照大御神次洗右御目時所成神名月詭命と有る此第
 六ハ一書も然り其より紛ハなるあり若て天孫降臨章
 第一一書ハ猿田彦神の事を眼如ハ咫鏡而絶然似赤
 酸醬也あども有れハ伊弉諾尊の御眼の絶然ハ事眞
 澄鏡の如く有けむ言傳の有より其御眼を洗給ハ
 事を持白銅鏡トハ傳誤れりハ事灼然ハ万葉十六為
 ハ佐男鹿乃来立来歎久顔尔吾可死王尔吾社牟吾角
 者御笠乃波夜詩吾耳者御墨垣吾目良波眞澄乃鏡ハ
 どハ若此ハ詠物ハ目を眞澄鏡ト云れハ然も混ハ
 七傳ハ若此ハ詠物ハ目を眞澄鏡ト云れハ然も混ハ

○日本書紀傳九

○四

此神代紀の首尾に亘り
 〇白銅鏡仲哀天皇御紀に
 見えたる共麻須美能加賀美と訓り出雲神賀詞
 小麻蕪此乃大御鏡とも有り麻蕪此ハ眞澄の義有り
 万葉小ハ多ク眞十鏡と書る中ハ八又者ハ眞鏡十ハ銅鏡と有
 ハ銅を以て鑄を以書るあり十三二十ハ眞十見鏡と
 有を十六三十ハ眞墨乃鏡と有ハ須とも曾とも通
 ハ一云ハ一者あり叙秘訓ハ私記曰問案万葉集召ハ
 者須典曾音通用故或云麻須美或云麻曾美云ハ有
 見えたる其ハ十二ハハ馬鏡ハ有ハ馬鏡ハ有ハ馬鏡ハ有
 馬を追ハ曾字と云ハハ馬鏡ハ有ハ馬鏡ハ有ハ馬鏡ハ有
 午の誤ある可ハ一叙述義ハ私記曰又問今讀之麻須美

其意如何答是猶眞澄也言是眞曾澄清之鏡也と有り
 此ハ通證ハ彌徳天皇御紀曰以眞白鏡所鑄之鏡也
 由ハ志曰古無純銅作鏡者皆以錫雜之本草曰白銅也
 南之見ハ但古ハ銅を以て鏡を造事ハ非ずハ鐵
 を以て作ハ其義を被用たる外固ヨリ渡水ハ白銅を以て造
 字ハ其義ハ難事あり抑鏡ハ一也宝鏡開始章第
 一書ハ思兼神云者有思慮之智乃思而白曰宜圖造
 彼神之象而奉招禱也と有て是始あり古事記天石屋
 於是天照太御神以為怪細開天石屋戸而内告者云
 尔天宇受賣白言益汝命而貴神坐故歡喜吟樂如此
 言之間天兒屋命布力玉命指出其鏡示奉天照太御神
 之時天照太御神逾思奇而稍自戸出而臨坐之時云

又有て其鏡小皇太神の大御像を移して汝年小益の
 て貴き神在すと申し、奇しき給ひて御戸を
 出て臨坐る、鏡と云物を始て見行し、故あり本よ
 り有来り物ありむ、然耳奇しき給ふ可非る
 者をや但古事記小天照太御神小御頸珠を賜ふ事見
 え此第六一書小軻遇突智神を斬給ふ所小所帯十握
 釵と見えたる此等、玉作神鍛右神の成坐り以前小
 己の其物有つれば、此時小白銅鏡も何ごう、無らば
 りむと思ふも、一旦りの論、有れども化て神の物
 を製造給へる、其必無て叶はざる時、在る事あり

公にす此鏡小皇
 ありと見えて記
 小万物之始皆有
 由今有此鏡何人
 初作哉答未詳
 問此鏡今有何
 処哉答未詳と
 云り

有れば事無小豫小造りて給ふ可も非れば、此を誤傳
 と見る方ある、平穩あり、有べうりける、按ふ小白銅鏡
 と云、右ありたる天石屋戸の前ありて其鏡を奉給ふ
 即出させ給へる傳の有るも取て又打混りせたる者
 たりける、○化出之神、神世七代章第一一書小其中
 自有化生之神と有る、成坐と云、同小くして事
 輕き方あるを化出と云時、出字大、力有り其鏡
 を持せる御手より成出給へり、と云義あり、化、此物
 被物に成りたるを云、白銅鏡の化して日月神の
 成りると云、非る可、鏡を御手より給ふ即成
 出坐り、とあり、訣、白銅鏡、清心、謂と云、ひ、纂
 疏、小日生、東、改用、左、神、月、生、西、改用、右、手、あり、と、宣、べ、る、ハ
 其、小、古、意、○廻、首、ハ、神、を、化、出、給、ふ、時、ハ、何、れ、ハ、ウ

正しく向はせ給ふ故に左手右手を用給ふ其の任
あるを今度の後方を顧みせ給ふ故に廻首し給ふ
り第十一書に保食神廻首嚮国則云て又嚮海則云
ふ又嚮山則云て有る何れも御首を彼方此方
ふ向へ廻るせる首字の本に美具志と有る從ひて訓
べし中昔の物語書あども常多き語あり又美久昆と
訓も惣りくず儲久昆は上邊の義あるを美具志と云
時ハ御櫛を剃せし處あるを以て之稱と聞えたり其
十一書に首を加字倍々訓るハ上邊の音便あり如
此く同字を二所あて訓を易なるハ美具志と云ハ少
敬の意有る可し○顧眄之間下此云美婁摩次可利尔之註
さゆたり谷川士清が見間疎ありと云る然も有べし

仁天皇御紀
率性有り此

左右の御手ハ御鏡を持せし正しく嚮ひて視給ふ
あるを其御鏡の方を離れて斜に向はせ給ふ故に見
間の疎ゆるあり名義亦ハ顧も眄も加開理美流之訓
了字あるを所ハ麻波苗又與古米あども有る其意明
くけし又流眄を那賀志米とも有り儲日神月神其
鏡を離れて横ハ目を見遣○質性ハ稟賦ハ源氏物
給ふ事を云る者ふむ語あども謂ゆる本性あり万葉九
難字和久良婆尔成有吾身者詠るハ人之生る事
の難きやて此とハ別あるが如くあれども神武天皇
御紀ハ天皇生而云長而去と有る以思ふ生れ

△謂や照徴於六合之内なり

たる任の各其性の異なる所も有ざるを新く年の
長る小随ひて其質分る者ありハ質性も人小仕立
上たる上を云あり名義抄ハ質を美とも加多知とも
又人登那理又人登那流又心邪志とも種ハ
訓たり委しくハ興台産靈命の下美麗ハ云ハ○明麗
正書ハ光華明彩と有ハ同ハ古語拾遺ハ日像之鏡の
事を次度所鑄其狀美麗と有を太玉命啓曰吾之所捧
宝鏡明麗恰如汝命と有て其ハ宇流波志と訓るハ後
小可本ハ比理宇流波志と訓る其も然る事ハ有
拾遺の訓○使照臨天地ハ宝鏡開始章第三一書ハ請
を取れり○使照臨天國自可平安と有ハ如く日神月神と坐て

天地の間を御照し坐す御事を申せらるり若て
語を借用ひさせ給ひて古より以來
天皇等

の天下所知者ハ御事ハも照臨と申せり其ハ天下を
所知者ハ日月の御照ト坐す如く残る隈無く所
知者ハ明らめさせ給ひて大御政ハ執行ハせ給み者
ありハあり其意を以見る時ハ日神ハ天を令知の
月弓尊と同神あり月神ハ地を令知る事と成て素戔嗚尊
一証とも成べくハ崇神天皇御紀詔ハ惟我皇祖諸天
皇光臨宸極者豈為一身乎と有る光臨ハ此の照臨ハ
同ト統紀第四十二詔ハ八洲国照給此治給布俵根
子天皇光孝天皇実録詔ハ朕我食国字平安久天照

△照臨の字圖書
不出たり

之治聞食類とも有り又古事記朝倉宮段あり古事記
曾能波那能長理伊麻須多此加流比能美古と詠せ
給へるも天津日嗣を天津日不准へ奉り者あり
○好殘害第三一書小多所殘傷と有る共小曾許那此
夜失流と訓り正書お令国内人民多以矢折と有る是
あり物小害ハひを為曾許那布と云ハ古事記白堯
小即伏最端和迹捕我悉剥我衣服因此泣患者先行ハ
十神之命以誨告浴海鹽富風吹伏故為如教者我身悉
傷之有ハ如し但此ハ殊更小殘害とせ給ふとハ非
れども神性の健く進り坐小依る事上
るが如し此あり好字あどハ惡神の如く云ハ為あり
給ふ

二第

ふふ又君の世を治り給ふも大體の宜しきを謀り
て然る細い事の必あり道を悉く云ふ
至りざる者あり況て二神の御子とて天下の君臨
して許多の大功を建給ふ大神坐せハ少ある物の
害も時取て何ぞり ○令下治根國ハ此時根國ハ下
着給ふハ非れども其逐給ふ事を云ふハ然れハ下
字ハ正書の遂逐之と同じ義小見る可し此ハ他ハ讓
りて甚く事省て記されたり
アルフミ、イグ、ヒカミ、ツキカミ、ステ、アコシテ、ツギ、ワタテ、ヒル、ゴラ。
一書曰日月既生次生蛭兒
此兒年滿三歲脚尚不立初

○日本書紀傳九

〇九

伊弉諾伊弉册尊巡柱之時
陰神先發喜言既違陰陽之
理所以今生蛭兒次生素戔
鳴尊此神性惡常好哭恚國
民多死青山爲枯故其父母

勅曰假使汝治此國必多所
殘傷故汝可以馭極遠之根
國次生鳥磐椽樟船輒以此
船載蛭兒順流放棄次生火
神軻遇突智時伊弉册尊爲

○日本書紀傳九

○十

軻カ遇グ突ツ智チ所ノ焦エ而ヤ終カ矣キ其コ且リ
カガヤミシキコリノ
 終カ之ノ間ノ卧レ生ハ土ノ神ノ埴ハ山ノ姬ハ及マ
カガヤミシキコリノ
 水ノ神ノ罔ノ象ノ女ノ即チ軻ノ遇ツ突チ智チ娶ノ
ミツノカミミツハノメヲオスナケカガツチ
 埴ハ山ノ姬ハ生レ稚レ産レ靈レ此ノ神ノ頭ノ上ニ
ナリカヒコトクハロホリノナカニナレリイツケリタナリモノ
 生レ蠶レ與レ桑レ臍レ中ニ生レ五ノ穀ノ罔ノ象ノ
ナリカヒコトクハロホリノナカニナレリイツケリタナリモノ

此云美都波

此ハ正書コレヲの続イフく文ミ有ツるが故ハ日ハ神ノ月ノ神ノ事ノ甚ク
 事略コトうせ給ハひ次ニ火ノ神ノ以下ノ生レ坐レる事ノを委シく為ス
 了ル以テたるが故ハ中ニ異レある傳ハみ如ク成ルる者ハあり然レれ
 とも四ノ神ノを生レ給ハひ畢テ火ノ神ノを生レ坐レる事ノ甚ク正シく
 傳ハあり次ニある第三ノ第四ノ第五ノ等ノの一ノ書ハ三ノ傳ハ共ク又
 此ノ異レ説ハあり以テ能ク雜ヘ讀ハべき者ハあり○日ノ月ノ既ニ生レ
 日ノ神ノ月ノ神ノ之ノ訓ハべし天照太神月読尊共日ノを所知ス
 者ハ日ノを所知ス者ハ神ノ之ノ所ニ御レ在リ坐レけれ日ノ月ノ不レ

ハ坐ざぬハ此めてハ通えざるを右も云る如く正
書一本あり傳あり故に其の生曰神云ハ次生月
神云ハ有ハ任めて此ハ甚く略りれたる者あり
記傳六ハ引れたる伊勢人龍氏ハ説ハ日神月神
者有ハ之ハ身帶ハ光明者非ハ外典説ハ陰陽之精者佛
經説ハ天子月天子者也日月二天子人其形云ハ今時
其説孰信之哉云ハ神興懸空日月為各別解未聞古人為
書たるも亦日神月神たる事云ハ更あり○次生蛭兒
此兒歳満三歳の満ハ字の如く満礼杵毛ハ訓ベハ三
歳の間を全ク盡ハ満たる由あり 正書ハ蓋ハ三歳ハ
ハ有ハども其ハてハ満字を書セ 同トハ訓来ハ事ハ
給へるハ對ハて詮無ハ可キあり ○脚尚不立此ハ脚
ハ葺の誤ある事傳ハ六丁ハ註せるハ如ハ○初伊勢

諾伊勢丹尊巡行之時云ハ此ハ甚ク心得ず其ハ巡行
ハせる時の事ハ宵^ノハて給ふとありハ此ハ前ハ
幾千ハ生坐^ス御思ハ稟^ヘキを此時ハ至^テ其應有^ハ
如何ある事あり此ハ八洲起元章第一ハ書ハ陰神先
唱曰云ハ陽神後和之曰云ハ遂為夫婦先生蛭兒去^リ
次生淡洲^ト見元^{タル}是即巡行の時ハ唱和の御事違
ハ宵^ウル者あり此ハ依^テ天神以^テ太古^ト合^之乃教
曰婦人之辭其已先揚乎^ト有^テ今茲^ハ出^ベキ事あり
ぬを其正書ハ陰神の先言坐^ルを陽神の不祥^ト宣^ハ
耳^ハて蛭兒淡洲の生出^{タル}事の漏^{タル}故^ハ此章

小至て正書小俗小一々三男と謂のる中此怪見も
入れる故小其章小此を省き此一書小正書と共
小同トく出たる小有心けれども怪見ハ豈神あり
也や淡洲と共小同トく國工あり此小入る時ハ前
後打合ひ難くして首尾の結ハれざる所出来る者亦
此辨己小傳七卷第一一書小就て季一云れハ今
云小限り小非すと雖も餘り小異在る傳ある故小
非ずてある得○先祭喜言ハ八洲起元章小陰神先唱曰
意哉遇可美少男焉と有小和給へる事ハ無耳て陽神
不悅曰云くと有る不悅ハ其知小當れるを以て其唱
和共小喜言ある事知べし如何小も二神の御面を合

ハハト云フ小同
佐賀と云小塔ハ
ハハト云フ小同
ハハト云フ小同
ハハト云フ小同
ハハト云フ小同

せ向ハせ給へる御心の愛の盛小進もて出る御言小
一有此ハ信小喜言と謂の可き者あり傳六卷
下小委一云るを此○違陰陽之理八洲起元章小陽
小見合す可くある○違陰陽之理八洲起元章小陽
神不悅曰吾是男子理當先唱如何婦人反先言乎事既
不祥と有る是あり傳六卷七十○此神性惡八洲起元
章ある不祥小同ト傳六八十○此神性惡八洲起元
性惡後漢華陀傳○意名義概小伊加流も布都久年
為人性惡難得意○意名義概小伊加流も布都久年
とも有り此小も古より布都久年と訓来れるを通證
小重遠曰布豆久會憎之謂と云るハ然る事あり今も
人の怒る時小頼を念ふ事有り其小京邊の詞小
人の憤りて

物言ふを夫都て訓と云ふも言と云ふ意あり然るを頰を合ふして口を嚙みて物言ふ如くありや○国民ハ正書の国内人民を約て書れらるる其訓同一第六一書ハ伊弉册尊曰愛也吾夫君言如此者吾當益殺汝所治国民日將千頭と有る国民又此ハ同ト諸正書ハ令国内人民多以矢折此ハ国民多死と有る此二共ハ伊弉册尊の御言ハ合ると又第六一書ハ素戔嗚尊の御言ハ吾欲從母於根国と申給へるとを合せて其考無てハ得有まじき事ありけり古事記者欲罷此固根之堅洲国而哭と有て此の正書ある者及此一書ハ父母ハ係たるとハ異あり故思ふハ正書第一一書ハ日神月神ハ勅任一の事有

て此素戔嗚尊ハ勅任一給へる事の見えざるハ其ハ二神の相生一坐三御子ハ御在るハ故ハ父母二神の勅任一給へるあるを素戔嗚尊ハ其事の非ハ月詭尊と同神ハ坐カ故あり然れハ正書ハ此神有勇悍云と第一一書是性好殘害云と此ハ此神性惡云と有るハ伊弉册尊の根国ハ入るて給へる後の事あり富遠ハ適之於根国と有も令下治根国と有も可以馭極遠之根国と有も伊弉諾尊一柱の御計ハある事灼然然るを此事を父母二神ハ係て傳へたり故ハ月詭尊ハ素戔嗚尊とハ又異神の如くハ傳ハれり者あり然れども右ハ引る伊弉册尊の御言ハ若て其素戔嗚尊の御所行ハ相类たるハ心を着へし若て其

二柱の珍子の中天照太神伊弉諾尊小屬給ふ故
小萬十一一書保食神の身より化物を取持て
奉進所于時天照太神喜之曰是物者則顯見蒼
生可食而治治之也之宣衣食の事を起初給へる
あむ第六一書ある伊弉諾尊の御言言勝て伊弉諾
尊乃報之曰愛也吾妹言如此者吾則當産日將千五百
頭と有る御言叶ハセ給へりける是即皇太神の
善ハ一大御神性ハ坐右の事を古事記ハ
之有り儲又須佐之男命の御荒比の所離天照太神
之營田之阿理其亦其於聞大嘗之殿屎麻理散故
虽然為天照太御神者登賀米受而告云詔直素交鳴
云々有て想ての大御心を想像奉るあり

尊ハ伊弉諾尊小屬給ふ故小其御心の進依て
国民多死あが云事見え又第十一一書保食神の許
小到坐所保食神夫品物悉備貯之百机而饗食之是
時忽然作色曰云々迺拔劔擊殺有神性の健速く
坐故あり又古事記大穴牟遲神の其御許往坐る
所小尔其大神出見而告此者謂之葦原色許男即喚入而
令寢其蛇室云々亦来日夜者入吳公與蜂室云々亦鳴
鑄射入大野之中令採其矢故入其野時以火廻燒其野
云々其父大神者思已死訖出立其野尔持其矢以奉之
時響入家而喚入八田間大室而令取其頭之武故尔見

其頭者吳公多在云し故咋破其木実會赤土唾出者其
大神以為咋被吳公唾出而於心思愛而寢之見えたる
如く大穴年遷神其御子の坐り然れども表の少
も御憐の御事無して其神の身之給ふ可く種く不徴
一害の給ひて其器を試させ給へるが終り其屈折れ
給はざるを見究め給ひて此神ころと御心の愛しく
所思にて御寢坐る是れ此大神の裡の御心隠るひ
竟ずして頭なれたるあり然れども此大神の御上を悉
く御悪行の如く言成し奉らむ事ハ始終を惣括らざ
る者あり保食神の事有し其時取てハ一時の御
悪行の如くありとも此の依て衣食作の三

物出来て世中の利用と成れるあど其事の終り何時
わても妙不善ハ一きを以心得有べき者あり有け
る諸伊特冊尊の日ハ今頭を縊殺さむと宣へども其
極意ハ至てハ甚く深く妙ある趣あり有る事ありて世ハ
死生存亡の道の因て起れる耳ありす伊特諾尊と上
津下津国ハ別處を建て相有たせ給ふ所申す己ハ明
くむる説有を其ハ第六一書第七一書ハ就て云か如
く然れハ素戔嗚尊ハ性悪常好哭恚云々有も亦其
如くハ神性の健く速く進み坐す事ありを甚く
書取られたる者あり可畏けれども己ハ當昔其説ハ
聞在りあり況て後人の思しき狀ハ説僻めたる其説

を也天照太神と共々天皇尊の大御祖と坐し又幽事
所知者大神の御父神の御在して甚と貴き大神
の坐す者を能其本根を原ぬ盡さずして假初ある説
を成して神を誣ひ人を欺りむ事い忘ても慎しむ
為りトキ者あり想て素戔嗚尊の御悪行の如き事
戀慕の御母神の下津国に入りて坐して後未幾許も非ず
て坐し間天天下を治給ふ御事も何も打忘させ給へ
るが故に御父大神の御座られ奉り給へ
非る事を努む忘る可くす○多死ハ佐波亦許登
阿理と訓ふ可く叙秘訓の志奴不可説之許登
阿理止可説之と有る依て定む可あり代々の私

記の例然る忌いし事ハ御説の憚る故に字の如く
訓す志奴を避たるあり己ハ正書の次折あるも
御前にて説奉る可く避たるあり天 第十書ハ遺天
熊人往者之是時保食神実已死矣と有る撰津風土記
昔豊中可乃賣神常居稻掠山而為膳厨之處後有事
不得已遂遷於丹後国比達乃麻奈葺と見えたり此ハ
依此ハ保食神ハ死坐る可く非れども有事と云事の
床して此ハ引るあり有事ハ其人の上ハ節の出未
ゆる可く無事の及ある事人の知ゆるが如く万葉七
三下大海候水門事有従之と有る並て椽衣人者

事無跡と諫るを以知べし又五三十一十靈剋内限者平
氣久安久母阿良年遠事母無蒙無母阿良年遠と有も
事も有り禍モアリ有りの及を云る者あり然れハ死を許登
阿理と云も唯小避たる耳あらず然も云らざる可
事あり又四巻小吾背子波物莫念事之有者大尔毛
あり今も人身の恙無きを俗小無事○青山為括正書
と云るも此小有事小對ひて叶へり
小出傳八八十一○故其父母勅曰ハ正書小故其父母二
神勅素戔鳴尊曰と有小讓りて略記されたる者あり
然此とも此二共小素戔鳴尊の神逐の事を父母二神
小係たるハ傳の誤あるハて實小ハ第六十一書の如く有べ

事苦ある事己ハ上小註る如し○假使ハ母志と訓
心マコ瑞珠盟約章ハ天照太神復問曰若然者將何以明
尔之赤心也對曰云々如吾所生是女者則可以為有濁
心若是男者則可以為有清心云々宝剑出現章第五一
書ハ韓卿之嶋是有金銀若使吾兒所御之國不有浮室
者未是佳也あハ母志と用へる例を考ふハ其事の成
行を亦其如く有ハと危ぶむ云あり然れハ言義ハ亦
志ハ不有べき万葉十一ハ馬音之跡持登毛為者松陰
高高多ク但古き訓ハ多登比と有り名義ハ假使を假
令をも假如をも假有をも皆共小同ハ多登比と有

△十一卷下下小々々
去立符尔若雲
不采益者庶幸
若十九卷三十四下
君之佳若久尔有
導不

り共小又母志とも訓へき字あり其義於て異あ
るざる可し故母志ハ所ハ多ク有リ故ハ此ハ本
の任ハ多ク登ル此ハ訓ハ聲ハ先ハ在ル事ハ此ハ物ハ此ハ
て云ハあレバハ此ハも其ハ目ハを知ル所ハあルを思フ可シ
其行跡ハ此ハべテ云ハと宣ハ上ハ所ハあルを思フ可シ
汝治ハ此ハ国ハ第六ハ一書ハ素ハ鳴ハ鐘ハ者ハ以テ治ハ天下ハ也ハ
有ル此ハを云ハあり傳ハ八ハ十ハ不ハ可ハ以テ君ハ臨ハ宇ハ宙ハの下ハ云ハ
り治ハ字ハの事ハ傳ハ七ハ卷ハ八ハ洲ハ起ハ元ハ章ハ第一ハ一書ハ宣ハ汝ハ往ハ循ハ
り之ハのハ下ハ云ハる如ク国ハ土ハを修ハ理ハ固ハ成ハの起ハる言ハを
りるハ○必ハ多ク所ハ殘ハ傷ハ此ハハ御ハ父母ハ二ハ神ハハ御ハ言ハあり第
一ハ一書ハハ是ハ性ハ好ハ殘ハ害ハ之ハ有ルハ他ハあり其ハ御ハ本ハ性ハを云ハ
りて同ハト事ハあル其ハ用ハひたる意味ハ異ハある者ハあり○

極遠之根国叙述義ハ根国私記曰謂黄泉也之有り然
れハ万葉九三十三十三遠津国黄泉乃思丹之有ハ異あり
す極ハ祈年祭詞ハ谷能極度極幅能留限利とも
又天乃壁立極国乃退立限ありとも限ハ並ハて共ハ物
際限を云言あり万葉三ハ極貴物者酒西有良之十一
際あり活ハけハ言あり多麻伎波留を又万葉遠ハ近ハ
五ハ靈ハ刻ハ十一ハ玉ハ切ハとも有ルを見ル可シ遠ハ近ハ
對ありカ知可ハ聯處あり我所在ハ聯あり意遠ハ處
大ハて我所在あり引伸ハて大あり義あり大を留ハ云
ハ古事記ハ御大之前あり有ル以知ハハ楮大地の圖
體ハして環の端無カ如クあり各其所在あり根ハ

云以底之指す方にて何方ありも極遠之云物ハ地心
あり外ハ在る事無ハ根国底国ハ在處此を以て思
ふ可き者あり又此を鎮火祭詞ハ下津国云ハ万葉五ハハ之多敵と訓ハ此を以根国底
国ハ月国あり○次生鳥磐櫂樟船ハ正書ハ載之於
事を曉る可し天磐櫂樟船ハ有ハ其船の有ハ載た由ありを此ハ
先此船を生て次ハ蛭児を載給へるありハ少趣異ナ
りト虽も共ハ誤傳ある事傳七五十傳八九十ハ委ナ
ク弁たはハ如ハ但古事記ハ生鳥之石楠船神亦名曰
天鳥船之有ハハ船ハ非ずトハ神を生給ふトモ
為ハけ取トモ櫂樟ハ神代ト虽も途ハ後ハ素戔嗚尊

の初て生ハ給へる本ハ有ハ此ハハ叶ハず諸思
此ハ素戔嗚尊云ハハの事有て次ハ生鳥之磐櫂樟船
ト續きて有ハ若ハ宝劍出現章第五一書ハ素戔嗚
尊曰云ハ眉毛是成櫂樟ト而定其當用乃結之曰及
櫂樟此ハ兩樹者ト以ハ為浮定ト有る傳ナリ混ハて此ハ
屬ハルガ又蛭児の事ハハ○順流放棄ハ此兒年満三歳脚
混ハ入たる者ト見ハ○順流放棄ハ此兒年満三歳脚
尚不立ナリ直ハ引續けて読ハ心得る時ハ其深味有
あり其ハ己ハ云ハト如ハ蛭児ハ神ハハ非ズトハ
国あり事古事記ハ見えたり以為生成国土奈何ト有
る文ハて著きを国ハ脚ト云物有て其立不立を云ハ
クハぬハ脚ハ葦ハて不立トハ三歳ハ満ルトモ生立
ざりハありハ其漂在ハ任せて流るハ任ハ放棄させ

公齊明天皇二年
御紀云以舟二百隻
載石上山石順流控
引於宮東山と有
て順流ハ船云
語多れども此ハ
叶ハ

給へるあれハ此ハ順流放棄を取れり正書ハ順
有ハ船の縁ハて傳ハれるあれども八洲起元章第
一ハ書又古事記共ハ葦船ハ有を始ト一ハ九ハ蛭見
ハ船を云ハ何れハ神ト取心得ハる傳ハ○火神軒
成ハるるハ其ハ此ハ取ハるハるハるハるハるハる
遇突智神武天皇御紀頭斎條ハ火名爲嚴香来雷ト有
リ古事記ハ火之迦具土神ト作ルハ文中生火之夜
藝速男神亦名謂火之炫昆古神亦名謂火之迦具土神
ト有ルハ此外ハ本御名ハ別ハ在ルハけり記傳五十五
下ハ迦具ハ赫ト之意其ハ迦賀トモ迦藝トモ迦具ト
モ迦宜トモ活ト同言ハリ迦藝ト云例ハ若櫻宮改
大御歌ハ火を加藝漏肥ト詠給ハ万葉二下十ハ香切

△ウ天孫降臨章
ハ謂ルハ星神者
二背男の香ト
赫ト云ハ出雲風
土記鳥根郡加賀
師條ハ閨若屋
詔金弓以射時光
加ハ明也故云加
ホトト見えたり

火之燎流荒野ハ有ル是ハ何迦宜ハ影ハ有
カ如シ出雲神賀詞ハ夜波如火崖光神在利ト光字
を迦賀夜久ト訓リ又万葉六ハ炎乃春尔之成者トモ
肥能波那トモ富能富トモ見ハ名義ハ阿都志ト
有リ又記傳ハ火之炫昆古神ハ火之炫ハ阿都志ト
異記ハ炫ト加ハ也計利ト訓リ字書ハ迦賀ト訓ハ靈
火光也トモ明也トモ注セリト有をト思合ス可
突智ハ記ハ土ハ作ル此ハ假字ハ彼ハ借字ハリ
右ハ引ハ神武天皇御紀ハ雷ハ作ル其正字ハ可
一其ハ鎮火祭詞ハ麻奈第子ハ火結神生給ハ美保止
被燒ハ石隱坐ハ云ハ此能心惡子乃心荒波云ハ皇
御孫能朝廷ハ御心一速此給波志爲ハト見え亦名を

本國神名帳後四位
上香都知神と有る云々

其鳴神社八文徳天皇
皇録云嘉祥三年十月
乙巳相太子紀伊國
從五位下清和天皇
録貞觀元年正月十七
日紀伊國從五位下神
從四位下と有る此其
御歌云成坐る雨神
子可也

三代天皇貞觀元年
正月十七日奉授從二位
上勳伊香都知神從四位
下同八年閏三月七日授從
江國從四位下勳八等伊
香都知神從五位上見云々

三代天皇貞觀元年
五月十日授丹波國
正六位上從宮護神從
五位下同十四年十二月
丹波國從五位下阿當
護神從五位上元慶三
年閏十月廿四日授從
五位上阿當護神從四
位下同四年四月廿日
授丹波國阿當護山
無位雷神破元神從從
五位下と見ゆ此の依
思小阿當護神也
八位時再等云々云々
雷神ハ火雷神と有リ
云々火を脱せ云々
破元神ハ波逆神也
壇安座ハ非ト其ハ
途を年と云々事
三考考者便 例丹
波を多年波逆神を
那摩波と云何れも
を年と云云云云
本神ハ甲サリ云々
已破元神云々
あり斯ハ伊香都
火雷神山神三種
あり者云々

火雷神と申すも御心の一速く健く坐る義あり此香
未雷の雷も此の同ト記傳ハ工の都ハ例の助辞知ハ
盡さず借雷字ハ名義抄ハ伊加豆知と云ハ流迦微と
も訓る字あるを唯都知と訓てハ又意を盡さるハ
似たりと雖も都知ハ嚴持の由あり云々如神各式ハ
と思ひ定むる説有て第七一書ハ云々

紀伊國名草郡香都知神社有リ又鳴神社各神大月次
相嘗新嘗

靜火神社名神 同郡ハ坐も由有る事次ハ第三第四第
五第六第七等の一書ハ就て説ハ又近江國伊香郡
伊香具神社名神と有る同神と聞ゆ傳其伊稜威の
由ある可万葉十三ハ劔刀鞘後枝出而伊香胡山と
第六一書ハ就て又記傳五五下ハ神名式丹波國菜
云を思合す可

田郡阿多古神社も此神を祭とあり阿多古ハ御祖
を焼給ハ一故ハ仇子と云意ハ也と有り神祇拾遺
云書ハ愛宕権現端御前斬遇突智命也奥御前伊弉册
尊也當社明神の御事久代ハ平安城ハ北鷹崎の東ハ
を光仁天皇天應元年紀慶後今の地を開キ移奉ル
由云ハ神社啓蒙ハ其を引テ按當社者昔愛宕郡鎮座
之故有此名今北山大門村蓋當宮神門之舊跡也今虽
屬丹波温其故号愛宕歟云ハ然リ言ハテ山城國
愛宕郡ハ本此神社ハ起ル各あり事云ハ更ハ此
神の丹塗天ハ化テ娶給ハ玉依日賣命ハ愛宕郡三

合其社の神人を此山
麓に築き置て神
社と

井神社名神大月と有る社の坐し其御子片山御子神
社大月次相と有る神の坐し貴布祢神社各神大月と
有る閻羅神の坐しあつ皆由緒有る神等の其郡に坐
を以知べきあり此事神武天皇二年御紀の傳に云を
見て知べき者あり又神代系圖傳に松尾神書云軒遇
平安城乾陽愛宕山而除火災者也此神掌火災祭之
記の也戊寅仁當天王都守護神明坐す即天神第七隈
神也火災弘永久退年為也止天若宮仁被火産靈弘置
玉奈利偏仁帝都辭證乃基也と有り愛宕郡と云計の
神の坐しせの當昔大御隆元坐しけむを慶俊公被地に
移奉りしあり勝軍地藏と云者を本地と為つるあり
今ハ此の佛刹と成○古事記の火之夜藝速男神
竟たるあり憤ろしき

夜藝ハ燒と清音ハ訓ハ一ノ葉十五丁三ノ也伎保呂
頌散年安采能火毛我母二十四丁ノ夜伎多知能と有
あつ何れも燒ハ清む例ありあり又国名安藝をも
藝を伎と清るを思ふ可一速ハ迅速の義ある事傳ハ
七丁ノ云り鎮火祭詞ハ御心一速此給と見え又古事
記ハ肥国謂速日別と有る速火別の意あるあり火の
物を燒く事の速ク急クある意を以て負坐る御名亦
其火之燒彦神と云名も此ハ同ト但古事記ハ依ハ
若しハ燒を誤れりありむも知べしす紀傳ハ引
有るも其ハ決て誤れりあり○又火之燒見古神記
傳五丁ノ炫ハ迦賀と訓ハ一雷冥記ハ炫を加へ也

○日本書紀傳九

○二十三

△燄字名義所此
加理と極加夜久と
と訓ゆ

火の然立れは云と
ありは然立ては
無事

計利と訓ゆ云と有めて通心迦賀と云名義ハ上
引る如く香来と書る其正字ある可し物の薫るが
如く内より外へ顯るし謂あり万葉五十三
伎多氏受十二一廿一火氣燒立而あが有煙の事な
れども火中より氣の起立り意又却夫理ハ氣振る
をも思合す可し然れハ薪を燒て其然る物ハ火中
光ハ非ず其上下四方の明るき物ハ光めて火ハ
非る其即此の炫ある者あり然る時ハ光も火香有る
る事灼し其火ハ限るべし更あり神功皇太后紀ハ金銀
多之眼奈國と有る古事記ハ目之炎耀珍宝多其
國之有ハ火中就て云ハ非ず物の麗美しき録を

△六卷二十丁小石
隱加我欲布珠
十一卷十六丁小
燈之陰ハ蚊蚋
欲布と見え
映字を迦賀
布と訓る
右の同ト又二卷
十八丁

云事あるを思ふ可し又万葉中ハ香青生玉藻息津藻
七ハ弥那綿香鳥髪あど有る香も氣あり其唯ハ香
と黒とも云て海べき所あるを然云るハ其裡り
氣韻の出て麗ハ青ハ麗ハ黒ハ由あり然れ
ハ炫も其例ハ火光の麗ハけり○火神の未生坐さ
りハ以前より火と云物ハ煮より有を此ハ至りて其
神を生坐る事ハハも天地の初より天日ノ己ハ在て
日神ハ後ハ成坐し此國土ハ己ハ在て後ハ煮爰鳴尊
ハ君臨すが如く主宰の神を生坐るハ違ふ可くさ
る物ハ第三一書ハ此を火産靈と有を以思ふハ中
ハハ容易き神ハ坐さる事甲子も更あり乞其起
を云ハハ先天地の初時高天原ハ所成坐る神の御名

を天御中主尊と申奉る時、未氣の発動き出さぬ
以前の事ゆへ、其氣中の未火と云物有べし、次
高皇產靈尊神皇產靈尊の生坐し、大勢り大
小感けて相合坐す、結り其中より一物を大虚の産成し坐
る此の於て水次始て混成せり、其より其一物を物
實と爲て輕清くして陽ある物、上りて天と成り、
神名を可美葦牙彥尊と申せる葦牙と云其物の留り、上重疑日
て天日初て此の立て明らるるなり、古事記小前騰之
有を以其火ある事を曉る可し、若て地の重濁なる物
ありて凝場り難在し、
ども其天日の光を牽制して留ゆる公運和運を成せり
し事、因常立尊豊斟淳尊の傳ふ云るを見ん知べし

於是其天の清上より跡に残留おれる物、猶伊弉諾
伊弉册尊の天浮橋の天降らせ給ふ時、迄も浮膏の如
く漂在りしを二神天瓊矛を以て自凝鳴を採成し給
へる、即其矛を以て因中之天柱と突立て固させ給へ
る、依て大地始て締り、因土山川を生成給へる、因
て愈以て根底に至る迄も堅く成定りし者あり、然
れども唯朝霧耳有て董満りし、天日の光輝を受
得て大地の萬物を生じ、蕃息し給ふ事能はず、又地中
の火氣を含有おざりし、天氣地氣相結合はざり
し故に伊弉諾尊其を吹探し、其氣即風と成て其

神を天御孫命因御孫命と申す此小至て天日の光を
導乎大地の火を起す可き時ハ成り若て其神ハ
柱ハ成坐了故ハ其國中之天柱ハ就テ御名ハ須坐る
事傳十卷ハ説ハ見テ知ル此ハ神ノ相ヲ神ハ深ク親シ
奉ル世ノ下ハ云ハ此ハ見合す可し此時二神已
天地ハ成定れり之所思ハ天下之王者を生
むと思ひテ御児を生坐る奇トきクも異トきリ
も産靈の御靈ハ資テ天照太神ヲ生坐テ六合ノ内を
御照シ坐シ直ト天上ハ天神ヲ御許ハ送送奉奉
りせ給ハて高天原を所知シ坐シの奉ルせ給ハり是
りり天日の天地の底方の極ニ照徹ルせる光ハ悉

ハ此高光ル日皇太御神の大御光ト成ル其ハ宝
章ハ是時天照太神乃八ノ天石窟閉戸而幽居為故ハ
合之内常闇而不知晝夜之相代有テ知ル其時
の事を古語拾遺ハ九ノ厥庶事燭而辨ト有ル燭ハ其時
日神ハ顔ヲ若テ日神ハ天上ヲ所知者素戔嗚尊ハ
天下小君臨す世ハ至リて此ハ火神ヲ所生坐る事實
ハ所以有ベ其ハ天ノ火ハ神ノ火ハ共ト同ト物
なりト虽も天日ハ宇宙ハ光ヲ放テ給ハふを主ト為
て甚大あるを火神の火ハ地上ノ萬物ハ含ミて用を
為す火ハて天日ノ光ノ及ハ所ハ及ハ火ハ
其輔佐ヲ成カ如シ然レ日神ノ高天原ヲ所知者

て後此神の成坐る次第あり是と奇しく妙ある者
ありける予も此正月廿日神の御生坐る傳ハ此章
と思定る説を得る迄ハ天日ハ本より明在りけり
事右ハ云る如くありしうども其よりハ此の第廿一
書ハ斬刺遇突智時其血激越深於天ハ明るく成り
百箇磐石と有れば其ハ依て愈天日ハ明るく成り
を後ハ日神の天を所知者す世より愈く照燄く
事ありと思ひしうども其ハ甚し愚ある説ハ有け
内吾過りし人ハ亦同く過りしものども今思ふハ日
神の天上を所知者たる後ハ神ハ生給ひ又其後ハ
斬り給へる血の激上りし草木汝石自會火之縁也
血激瀆於石碑樹草此草木汝石自會火之縁也
み今一言も云へき節 借上ハ日神の高天原を御
照し坐るハ依て其大御光大地ハ照徹りて万物蕃息
てる時運ハ至れるハ故ハ又天神の御靈ハ資て此大

地ハ火神の成出坐る其産靈ハ依て万物ハ各火を
含てて天日の光を迎へ天日ハ大地ハ照徹りて大地
の火を起し給ふ故ハ萬物此ハ資て成て止さるハ
故ハ火神ハも産靈と申す御名坐る事ハて寔ハ妙ハ
奇ハ神事ある者あり得坐て記傳ハ吾輩後進ハ者
の爲ハ驚き置れたる事ハ依て予ハ亦奇異ハ者
ある事ハ思ひ得て大人ハ説ハ結を成す者ハ有り下
了 斬遇突智要埴山 ○所焦ハ第五一書ハ所始と有り
其ハ古事記ハ因生此子美著登見矣而病臥在と有る
記傳五十五下ハ見矣ハ夜加延と訓ハ古言あるハ被
矣被矣ハの類の礼と流とハ古ハ延と云ハ由と云

の齋明天皇御紀大御歌の倭須羅度麻自尔の被志也
ト云あり万葉一二十下家之思由五十下可久由既婆
比登尔伊等波延可久由既婆比登尔迹久麻延の被厭
被思あり又三十下祢能尾志奈可由七三十下衣尔須良由
奈十五二十下伊能祢良延奴尔あど此餘も多しと有
の依て此も夜加延と訓べし各義枚の焦字を賀須と
夜久とも訓し又多字をも又夜久とも古
賀須とも有る字義を合せて曉る可あり儲此の所焦
ハ右の引る古事記の依り決く御陰あり鎮火祭詞ハ
も美保止被燒此と有此バあり儲此ハ女神の御陰ホトの
事あれども男ありも然云ハヤ古事記ハ迦具土神ハ

も御陰と云ハバあり和名枚ハ陰玉壘玉門等之通称
也と有て和名を載さるハ共ハ富登と云故あり但其
義ハ各異ある可し男ハ富登と云ハ秀處の意あり其
富ハミホ穂穂鎗鋒あどホ穂又鋒ハ同トくして尖出たる
謂あり此事傳五卷二十一丁高云名義を説明せし
をみて知べし又傳六雄元之處傳七陽元の下
ハ云るを女陰を云ハ古事記段石屋ハ訓陰上云富登と
有り武烈天皇御紀ハ觀女不淨と有ハ富登持許言
と訓り會門處ホトの義ある可し記傳七五下ハ賀茂翁説
ハ富登ハ會處あり万葉ハ保ハ方留とも布保隱とも
云ハ同ト類ハ物を含む故ハ名ありと有ハ然る事

あれども右の不降ホトコの依レ此レ會門ノの方迫在ル可ク神
武天皇御紀の腋上ノ嘯間立ト有リ嘯モ會ハて古事記
浮レ穴ノ畝ノ火山之美富登ト有リ同ト山谷の會あり
て女隆の狀ある所を云るあど彼此思合ス可ク又万
會有ルを布キ米理ト訓ニ遊山屈ハ忍笑を保ト惠年と
云ルも會ハ咲アリ今俗ハ女隆ヲ燦イと云モ富登ヨリ
出タル○終ニ其ハ古事記ノ神遊坐セ也ト有リ同ト讀
者あり○其訓ハ美ヲけレ也ト撰者ノ心ハ終ニ爲ル意ヲ以
て書レたルある可クけレ見ル口惜ク各義ハ終ノ字
都比如クも伎波麻流と志奴と訓ニ書レたル字ハ當時
右ノ思ハ用ヒたル其心を以テ書レたル字ハ當時
足思ハ用ヒタル其心ヲ以テ書レたル字ハ當時
考出たル説有て已ハ鎖火祭詞講義ハ云ルを猶又下

心ハ其ハ鎮火祭詞ハ火結神生給氏美保止被燒氏
石隱坐氏夜七夜晝七日吾字奈見給比吾奈妹乃命止
申給比此七日波不足氏隱坐事奇止見所行須時火乎
生給氏御保止字所燒坐支如是時尔吾名妹乃命能吾
字見給布奈止申字吾字見阿波多志給比津申給氏吾
名妹能命波上津国字所知食倍吾波下津国字所知年
申氏石隱給氏與美津坂坂尔至坐氏所思食又吾名妹
命能所知食上津国尔心惡子字生置氏未奴宣氏返坐
氏更生子水神匏川菜埴山姬四種物字生給氏此能心
惡子乃心荒比曾水神匏埴山姬川菜字持氏鎮奉止礼事

教悟給^支と有て神避^と此上津国を避て現御身^亦
か^り下津国^の往坐^しを云^ふあり記傳五^一六^十の神避坐
世の神ハ神集神祝神逐神議^あどの神^のて^凡て神^の
御上の事^の尊^とて附云^ふ辞^{あり}と有^ふ如^く避^ハ名
義^抄ハ佐流^{とも}由久^{とも}能^能賀流^{とも}麻奴加流^{とも}
訓^て死^と云^義無^れバ古^も死^る事^を神避^とハ云^さり
け^し是^を以^て終^字の訓^ハ宜^しけれ^{ども}其^字を味
氣^無し^と云^{あり}暮疏^ハ人^以神^生改^訓終^日神^本と
ハ形^者載^神之^車也^神空^即人^死と有^ハ同^ト意^味あり
とも神^字を此^ハも多^ク志^此と訓^ハ一^ト魂^魄を^加
半^ハ云^ハ成^ハ後^奉難^ハ此^次の^一書^ハ云

古史微^第四^段云^く彼祝詞^{ある}傳^の趣^ハ伊邪那美
命^の與^美津^国の往坐^るハ其^御産^の後^の甚^下き御有
狀^を妖^神の御覽^し給^へる事^を耻^給ひて御面^を合^せ
給^ハト^と所思^食し妖^神の御許^を離^避りて現身^{あり}
往坐^るある^を其^神避^るふ語^を死^る事^を云^ふ古言
の如^云説^の由^来ハ甚^久しき事^{あり}て此^ハ豫^美と云
ハ漢文^の黄泉^字を當^て伊邪那美命^ハ其^黄泉^ハ往坐
り^と云^るより彼^土ハ黄泉^と云^るハ人^の死^て往^く處
の如^く云^ふ心^を轉^りせて其^ハ死^坐ての^後の^事
非^心得^しつ^子任^ハ彼^神の^離去^り給^へる^事を^妖神^の

悔きて匍匐哭給ひ其御涙小泣澤女神の生坐るとの
 傳を即妖神の尊骸の御枕方御足方の哭吟を以給へ
 る事と思成て言傳つるあり猶訛小謬を累つて其尊
 骸を葬奉るハ此所が彼處が或ハ殞歎之處を語傳
 へて可畏しとも可畏く見らるも聞らるも身の毛立つ計
 ある胡乱説共の廣くは甚も慨たぐ憤り哀
 しふと云も更けて如此辨云たハ心痛く而む採要
 云ぬたるハ古今始ての説あるが天下後世傳て
 又動くまは日説ハ此説ハあむ然れハ此御紀ハ更
 り古事記の文をも時取てハ彼詞の文を以正し辨

不可くあむ其ハ撰者ハ對奉りて世との識者ハ對
詞の端ハ高天原ハ神留坐皇親神漏美能命持
氏皇御孫命波豐葦原乃水穗國平安國止平久所知食
止天下所寄奉志時尔事依奉志天都詞太詞事以氏
申久と有る如く皇祖天神の傳給ふ御命あむ道ハ其文
を以て此を正さむハ何の憚り事あり有む道ハ神と
皇との道ハ即天下の大道あり也ハ私為べきハ
非ハ ○且終ハ神避坐年登為流と訓ハ其宜し例の
あり
 死り坐むと爲ハ非ず第三一書ハ其且神退之時と
 有を以知べし上ハ引了鎮火祭詞ハ見えたる如く石
 隠れ御在し坐て與美津枚坂より返坐して更生子水
 神匏川菜埴山姫四種物乎生給也と所見えたる其時
 の事あり故此神事を生坐て後ハ全く下津國ハ神退

給ひて終の返りせ給はざる故に且終るに有るあり然
ども終字ハ甚し異なり誤ある事已ハ上ハ云る如
人ハ死と云事の出来初たるハ彼絶妻之誓の後の
事あり第六一書第七一書第八一書等ハ斬斬遇突智
と有れども其御靈ハ天中上坐て火雷神と坐る所由
あやを思合 ○臥と古事記ハ病臥右と有る其あり本
小布志那賀良と訓る其も万葉十十六ハ伏居と有を
二三十ハ臥居と有然訓へく又二十ハ許呂臥者川藻
之如久又二十ハ荒床自伏君五二十ハも等許自母能字知
許伊布斯互と有て例も多けれハ置しくハ有れども
尚記傳五五十ハ臥を許夜須と云ハ古言あり推古天
皇御紀あり 聖徳太子御歌ハ伊比爾惠は許夜弊摩万葉

三四十同命御歌ハ客尔卧有此旅人五五ハ許夜斯怒
礼あり猶多一記中ハ許夜流とも有り又雄略天皇御
紀ハ反側万葉五八十ハ字知許伊布志はと有る許
伊も同言ハ活けるありと有ハ依て許夜志那賀良と
訓へ 但卧を布須とも許夜須とも訓る字ハ同トく
ハ其病ハ依て身の轉○土神ハ土ハ大地ハ地ハ同ト
万葉十一ハ八ハ大土採虽盡と有ハ大地を大土と詠る
あり儲此大地ハ一も悉く土魂ありハ其を立給ふハ
国常立尊坐一此を生成すハ陰陽二神坐一其天下之
主者と一て素戔嗚尊坐上ハ土神を生せ給ふハ必

其所謂を探索めず、有べう、ず其、此迄、成坐る
風神、火神の生坐て其司、給ふ例を考る、風神の
未生坐ざり、以前、大虚、素より氣の充塞、以る
所あり、然る、風神、其氣を動、す為、成坐るあり
次、火神より、以前、天日、已、在り、日神亦、先、生坐
て、高天原を御照し、坐、す、其、大御光、素より、大、有る
を、火神の後、生坐る、其、大御光を迎へて、地中の、火
の結、わり、出、て、蒸、暖、う、有る、あり、此、二を推、す、時、氣を
體、わ、り、て、其、用、ハ、風神あり、日を體、わ、り、て、其、用、ハ、火神
あり、皆、国、土、ハ、幸、ハ、給、ふ、方、ハ、資、て、右、の、神、等、ハ、成、坐、り

上天瓊矛を倚立て
國中之天柱と化して
給ふ事起

如此、其、大、有る、方、ハ、幸、給、ふ、と、其、を、巨、細、ハ、行、且、る、可
く、幸、給、ふ、差、別、の、有る、事、あり、れ、ども、予、も、今、日、迄、ハ、心、着
け、り、有、又、金、ハ、所、根、わ、り、大、地、の、根、有る、物、ハ、大、地、の
大、有る、あり、砂、礫、ハ、小、ま、至る、迄、も、其、氣、の、縮、り、て、其
形、體、を、成、す、ハ、金、氣、の、然、る、令、る、所、あり、然、る、ハ、金、神、ハ
成、坐、る、ハ、其、を、山、中、ハ、採、て、鏡、劔、ハ、造、り、刀、仗、ハ、作、て、国
土、人、民、の、利、用、を、為、給、ふ、方、ハ、體、用、の、差、右、の、如、あり
又、水、ハ、彼、浮、膏、の、若、ま、中、ハ、天、瓊、矛、を、指、入、て、滄、溟、を、獲
給、へ、る、ハ、依、て、土、水、始、て、形、と、異、ハ、爲、ハ、至、り、者、ハ
り、然、る、ハ、水、神、の、成、坐、る、ハ、雨、露、の、草、木、を、滋、潤、し、河、沢
の、田、地、を、養、ふ、ハ、井、水、の、食、用、と、成、る、方、ハ、幸、給、ふ、わ、て

子建波迹安王を崇神天皇御紀に武埴安彦と云るを
傳誤れる有る可し旧事紀に大便化為神名曰埴安彦
埴安姫と有り此の古事記に依て書る埴を波迹と訓
安事ある可しと云る謂はたけける埴を波迹と訓
るを名義抄に迹波とも訓るを以思ふ所生土の義か
る所や亦名を丹生都比賣神と申すも土生處姫神の
意ありはる記傳五五十七引はたる神武天皇御紀
の里取天香山社中土以造天平瓮八十枚云々又前年
秋九月潜取天香山之埴土以造八十平瓮躬自禱戒祭
諸神遂得安定區宇故号取土之處曰埴安之所見たる
を神名式に大和国十市郡畝尾坐健土安神社大月次
新嘗
と有を引て思ふ埴山の山は山岳の山は非ず借

字ありて弥聚あとの義あり有へま土を取し處を埴
安と云るも弥統の義にて埴土の生出るそ蕃息因はる名
ある者あり崇神天皇御紀に吾聞武埴安之妻吾田媛
蜜来之取俵香山土累領中頭新曰是倭国
之物實則及之有謀及不就為事ありはる也
山の埴を取はるが名とも成て武埴安彦と云るをも
又思合す備此神の嫁給へる軻遇突智神に火産靈神
と申す御名坐るを以思ふ埴山の埴安と同トくて
其意右の如くある然て産靈の義とある事申す
も更あり姓氏録門部連條に安年須比命と申す神名の例
有を以て安の物を生じて蕃息す義有をも思ふ可く
あむ有ける神名式に阿波国美馬郡波尔移麻比弥神

ハノ名義抄子録、
字を和称、也須録
字を和称、流又和也
須録、字を和称也須
有れ其説を
用、可く如く
ハ傳、九卷、三百四
十、下、云、事、有
り、可、合、可、

社有、記傳ハ名義ハ 埴黏あり、字鏡ハ埴謂作泥物也
埴を古訓ハ埴延之有リ、尚書禹貢ハ埴土赤埴埴也
祿夜須ハ令黏あり、令肥を許夜須ト云ト同格あり
有、ハ云、
如くあり、ハ其説を取らずト安ハ弥統あり
ハ云、又丹生神社ト申す国ハ多在ハ神名式ハ大
和国宇陀郡伊勢国飯高郡近江国伊香郡若狭国遠敷
郡三方郡越前国敦賀郡但馬国美含郡ハ見え
ハ那名ハ尾張国丹羽、有ハ丹生ハ轉あり、可ハ若
狭国遠敷ハ小丹生あり、可ハ越後国古志郡小丹生神
社ハ云も有ハ、あり、越前国丹生も此神名ハ依ハ
地名あり、但此等ハ何れも土を取リ地ハ就テ祭リ神

ハ有ハ豊後ハ土記ハ
丹生御昔時之人取ハ山
以、鼓未改因云丹生
御ハ見え又紀伊國
丹生姫記ハ菅社神
弘丹生大神宮ハ菅
道重武天皇天平年中
ハ云ハ水銀無之仁有
之、御神祇成候者
高郡之上田村之御神
ハ神神勅有ハ水銀
留故ハ天子第利丹生
御神乃御名弘被下候
由古年代記書付
御入候之有ハ此ハ伊
勢ハ丹生神社ハ事
あ、ハ此を以テ之を
取リ所ハ丹生ト云
之知ハ者

名ハ又地名トモ成ハ、あり、但大和国吉野郡丹生
新嘗ト有ハ、別神ハ丹生ハ地名ハ因ハ、
其ハ第六一書聞周象神ハ下ハ云ハ、
又宇智郡丹生
川神社ト有ハ、川神ハ又神名式ハ紀伊国伊都郡丹都此
ハ別あり者、あり、ハ此神ハ坐リ播磨凡土記ハ息
女神社、次新嘗、之有ハ、長帶日女命欲平新羅国下坐之時禱於衆神ハ時因堅
大神之子尔保都比賣命者、国造石坂比賣命教曰好治
奉我前者、戒尔出善驗而此ハ良木ハ尋梓根底不附国
越賣肩引国玉甲賀、益国若尻有宝百衲新羅国矣、
以
丹浪而將平賜、伏如此教賜於此出賜赤土其土塗天之
逆梓建神丹之艦舳、又奈御丹裳及御軍之著衣又攬濁

海水渡賜之時底潛魚及高飛鳥等不往來不遯前如是
 而平伏新羅已訖還上乃鎮奉其神於紀伊國管川藤代
 之峰之有り今も播磨國明石郡と攝津國八部郡との
 取の丹生山と云高山有る是あり其攝津國の屬る麓
 を丹生山田と云て一郷あるも其神の坐し地ある小
 因れる名あり下り引く正應の大政官牒の爲八荒鎮
 將之武神とも有て如此く武き大神の坐し軻遇笑智
 神の后神の坐せはあり可し筒香郷と云て紀伊國伊
 都郡の在り管川あり可
 大和國吉野郡の界の藤白峯有り今水呑峯と云ふ
 其鐘割峠之の筒香明神影向の岩と云ふ大磐石二
 重なり上ハ樹不繁茂して山の如く下ハ良小ハ
 磐上ハ物を置か如く川南第一の奇石ありと彼國の

名勝圖會 正應の大政官牒の乾道七世之胤子爲八荒
 鎮將之武神是以地神第三代天津彦彦火瓊杵尊始
 祐丹生廟祠号称常世宮人皇十六代應神天皇殊崇靈
 威兮定山地境社者豊受大神開闢之瑞籬也豈非日本
 最初之草創神者亦八幡宗廟歸敬之靈驗也旁播異國
 降伏之眞感文永年中以來蒙古荐窺本朝緯之怖畏超
 于先規國之杳冥在于此時而弘安四年四月四日同十二日
 當社明神号蟻通神託宣曰日本國神の發向蒙古任先
 例丹生大明神可令向一陳給之由議定既畢云々と有
 の乾道七世之胤子ハ二神の御子ハ坐を云り地神第

三代云、高千穂宮にて始て天社国社を祀定給入
り、事を云るあり人皇十六代云、其御世に藤代
峯あり所、小遷幸坐て此の鎮坐を云り社者云、
三宮氣比大神の本より鎮坐し所の共の鎮坐あり可
し其大神の御祖母坐せ、共の坐へき理あり、
異国降伏之真感、彼神功皇后の御時よりして有初
たる事右の引る風土記を以知べし号、蟻通神、第三
氣比大神の御事あり御祖母丹生大神の御言を奉て
託給へり、本國神名帳の五位敷八等丹生津比賣大神正位丹生高野御言之神也者、見ゆ式文の如き、二座ありとも今
祭る所、一宮丹生大神二宮高野御子大神三宮氣比

大神四宮巖嶋大神あり合せて高野四所明神と申す
云り神階、三代實録、貞觀元年正月廿七日甲申
紀伊国後五位下勳八等丹生津比賣神授後四位下元
慶七年十二月廿八日庚申紀伊国後四位下勳八等丹
生津比賣神授後四位上と有り或書、山史云、寛平九
年丁巳冬十二月鎮守大明神被授後三位淳方勳狀云
天曆六年五月奉增一階又云、兼曆五年二月又被奉增
一階又云、永治元年七月奉增一階百練抄云、壽永二年
十月九日紀伊国丹生高野神奉加一階宝簡集云、壽永
二年十月十六日勅正二位丹生明神今奉授後一位

有り此ハ丹生高野西神の神階あり今山史より次
此を推ハ天曆ハ正三位兼曆ハ後二位永治ハ正二
位あり然レハ百練抄と宝簡集の二ハ共ハ一時の事
あるガニハ傳ハルハ有ける其ハ京ハてハ勅使
記され社ハ其至る日ハ以記せる故ハ違ハるハ
有ハき若テ三四兩宮ハ兼元年間ハ御鎮座の由傳
代ハ然レども豊受大神開闢之瑞籬也と有レハ上
神階ハ事ありども此ハ主ト坐神あり故ハ
無ハる有ハきハ ○水神罔象女下ハ罔象此ハ美都波
見元神武天皇御紀ハ水名爲叢罔象女罔象女此云
弥菟破廼迷と有レ古事記ハ假名ハて弥都波能賣
神ハ有レ美都ハ水あり此ハ古言ハ水を清テ唱レ

ハ一華知ル言義ハ満ルハ山川草木ハ至テ迄皆水
を會ハ起メテ満ル云語の本あり此ハ方ハ盛
ハ荒方圓ある時ハ圓ハ満テ其器の神隨ハ從ハ事即
水の性あるを思フ可ハ通證ハ白沢圖云水之精名罔
象ハ有リ孔子家語ハ水之怪曰龍罔象也と有テ罔象
ハ水之怪ト云計ハ昇ハ者あるを此字を用ヒルレ
ハ事祥ハ一儲水ハ山川海陸共ハ充滿ル物あるハ
依テ山ハ大山祇神 谷ハ閻霧
神閻罔象神坐ハ速川ハ瀨織津比咩神水門ハ速
津日命海ハ大海神井ハ御井神水を引スハ水
分神雨ハ高麗神ハ持分テ主リ給ハ水神ハ何
此を司すと云ハ右の如キハ各其限の有を水神ハ

今但諸書に聞電
 神も高麗神も
 有依て何れを其
 定む可くずも
 熟果亦其本坐御
 敬神社を式六一
 座ありとも祝詞
 かの御國年皇神
 等と有る如く同
 御徳の神等、何れ
 社も其の鎮坐を
 相助御在りて故也
 猶傳十百九十五
 見へ

此神者雨師神也と有て何れ神とも知れぬ
 を神名帳頭註小兩師神也水神罔象女神也と見え二
 十二社註式小丹生社号雨師社延喜神祇式云大
 神罔象女神云と見えたる此小依て其祭神明る
 ある者あり雨師ハ漢土ハ然る熟字の有を取れる小
 ころ有け此師ハ土物を製るを土師と云美の師めて其
 主たる意あるあり漢籍抱朴子登涉卷中雨師有龍也
 雨師也とも又風伯雨師星也雨師一云屏翳一曰号屏
 一曰玄溟とも云ひ風俗通小師曠曰昔黃帝駕象車
 云風伯進掃雨師灑道虎狼在後と云う然れとも其小
 我雨師神あり此小可き者ありさるあり風伯の
 字を風神の事ハ此小被用水神土神ハ等しく成坐
 たりぬとも其神ハ別あり

神ある小共小吉野川の川上と川下とも分れ在せ
 るハ決て幽契有る事と見えたりける帝王編年記
 十四二十八十小寛平七年六月廿六日官符云大和国吉野
 郡丹生川上雨師神社四至之内禁狩獵と見え類聚三
 代格小見えたる寛平十七年符ハ應禁制大和国丹生
 川上雨師神社界地事四至東限鹽白南限大山岑西
 祢宜等解狀你謹檢名神本記曰不聞人色之深山吉野
 丹生川上立我宮柱以敬礼者為天下降甘雨止霖雨者
 依神宣造伴社と有り註式小人皇四十四代天武天皇白
 鳳四年乙御垂跡と有れとも右の符の如くハ神代小

△祈雨の奉幣有り
 大宮の大夫師範備
 奉行被為りて大内
 記傳辨障有る茶
 作りければ宣命を
 作り可き人無りければ
 二御恩の因て宣命
 を作りて大内記相衆
 たりとを号せしむれば
 此宣命必神慮有る
 田自證せしむれば
 竟りて三日雨降り
 降けりともいふ見文
 たり其

りの事と見ゆ光仁天皇御紀の宝龜六年六月癸亥朔
 丁亥奉黒毛馬於丹生川上神旱也其畿内諸国界有神
 社能興雲雨者亦遣奉幣と有を以其主として御事を
 明る可あり臨時祭式祈雨神祭條の丹生川上社貴
 布祢社各加里毛馬一疋云々其霖雨不止祭料亦同但
 馬用白毛と有て止雨の白馬を被用る例ありて宝龜
 の度ありも然り其祈雨止雨の抽出被祭給ふ八十五
 祢と二社あり殊に馬を加給ふと申すも全く水神の
 渡りせ給ふ故あり又同式あり奉幣丹生川上神者大
 知社主隨使何社奉之と有を大後神社注進狀あり
 此文を引て為當社之別宮也と有る所由ハ己不神賀
 詞講義古今著聞集保延元年五月朔旦裏書の當社
 云り

へ進了る、宣命を載たる其文の云く大神日域尔無
 跡多末倍遂窟雨師傳名太末倍靈祠然則谷山大沢
 利興雲之致雨天之云々有り又本朝世記の仁平三年
 七月廿日祈雨奉幣の宣命の就中大神者日域尔無跡
 礼雨師尔通名須遂屈乃靈祠興雲尔有便名山乃幽壩
 降雨尔無煩之云々とも見えたり異しき書狀あり
 此神の神威是れ如此く有べき者あり但日域尔無跡
 の有まよし文あり我大御国に生出坐て天下万国に
 御靈を幸ハへ給ふ大神に坐す者を其本末の差甚し
 事か又二十二社注式に貴布祢當社與丹水神同象
 女神也と見え諸神根元記に貴船同丹生と有り此を

諸社根元記の貴布祢水神美都波乃女神也と有れば
 何れも其傳同トきを二十二社次第同注疏の闇雷龍
 と記し和尔雅のハ今在記云闇雷象女也と有て闇雷
 神闇山祇神闇雷象女神共ハ同神あまを記紀共ハ誤れ
 る事傳十百十の就て説べきあり○斬過突智娶埴山
 姫叙秘訓の萬久止不可説之登理比或阿比比止可説
 之私記日問娶字説万人其義如何答男女會合之時正
 直身體不能嫁娶曲撓身體而後為之故云萬久と有ハ
 依て阿比比之訓べきあり登理比之訓事心得ずと虽
 も名義抄の娶字を賣登流とも登流とも訓之ハを

仁徳天皇御紀の大
 御歌の泥土漏能辨
 漏多柳武杖摩箇
 備鷄登登會之
 見え

取之註ハハを登流と訓ハハ賣登流ハ女取ハ同抄
 小妻字嫁字を賣阿波須と有ハ女合あり女ハ同ト
 此ハ取之耳も云べき者あり又ハ繼體天皇御紀ハ野絶磨
 俱你都磨ハ初寄泥底云ハ伊慕我堤鳴倭例你磨柯絶
 每倭我堤鳴磨伊慕你魔柯絶毎と有ハハ萬久と云事
 も亦常あり其ハ其御紀の傳ハ云ハハ事ありハハ
 云ハハ主人ハ有附ハハ事ハ俗ハ主取為ハハ此二神ハ妹
 妹ハ相娶給ハハ事ハハハ賣小皇祖天神の神隨ハハハ
 預相鎔造ハハ給ハハハ因ハハハ事ハハハ奇異ハハハ靈ハハハ
 妙あり御事あり其ハ朝霧耳有ハハ董滿ハハハ露氣始ハハハ

晴たる即日神の成出坐て天上を所知者しあり以
降天日の大御光大地に照徹す世と成初たるが其ハ
天地の全體の交接あり然るに此ハ火神成坐て其天
日の光ハ縁て地上小火を起し土神成坐て水土の交
ハる地氣を以て相合坐るハ依て其地勢ハ因准ひて
萬物の産ハり成る事此ハ起る者あり此ハ因て雜
産靈神の成坐る由緒此ハ成りけり此ハ預る日
風土記ハ曰軒郡内知鋪御天津彦火瓊杵尊云々天
降永日向之高千捷二上之茅時天暗冥晝夜不別人物
失道物色難別於茲有土蜘蛛名曰大鏝小鏝二人奉言
皇孫以尊御于技千捷千捷為叔投散四方必得開晴于時
如大蚺等所奏捷千捷千捷為叔投散即天開晴日月照光
云々有ハ天神御子ハ坐さハ所知者云々事ありを

大蚺等ハ知て奏せるハ朝霧を吹探ハせる氣より風
神成坐し又日神月神の生坐る即火神土神の成坐
事其御間より雜産靈神成坐て豊宇氣神の御祖ハ成坐
の暗たるハ此然申せり有ハ又此を以て其靈氣
雜産靈神を生せ給へる頃有ハ山姫神を娶て但鎮火
祭詞ハ吾名妹命能所知食上津国ハ心惡子并生置也
來收宣也返坐也更生子水神匏川菜埴山姫四種物并
生給也此能心惡子乃心荒也水神匏埴山姫川菜并
持也鎮奉止事教悟給也有て火神の御荒ハを令鎮
給ハむ為ハ土神ハ生置給へるあるを如此く御妹妹
成坐しハ御女神ハ唯火を鎮め給ハむ耳の御心ハ
りしりども其成坐る上あてハ必二柱の御力を合せ

火神土神と
御夫婦と成坐て
推産靈神を生
給ひ

御身を共ありて其火と土との氣を結聚めて萬物を
生し給ふ可く所思し成れるめて其も此も国土人民
の御靈を幸給ふ御靈の往合るめて尊しとも奇しき
御事ありしに於て神の御上ハ妙ある者めて火神を
生給へるハ因て伊弉冉尊ハ石隱給ひ其火神を惡坐
し依て水神土神を生坐て其幸云べくも非ず大に成
り伊弉諾尊も火神を惡し所思して斬給へるハ大雷
神大山祇神高靈神を成給ひ御刀より経津主神武甕
槌神の祖神等成出坐て妙ある事共多在り世中の理
も亦如此有べき此御時あるの御事ハし何れも

二神の御上りても快しと思さざりける事共あ
れども甚しき善事と成れる事ハし彼夫婦講合の
御事の善しとある有て火神を生給へるハある可し
先ハ夫婦講合の御時ハ生坐り蛭見淡洲あるハ始よ
り終迄ハ善しと非ざるを此時あるハ其とハ及ハ
し火神あるハ火産靈神あるも申す計り尊き大神ハ
坐あるハ縁の事ハ非ざるを思ふ可し其時の事ハ此
ハ合せて此ハ其並なるハ生推産靈古事記ハ和久産
巢日神と作り舊事記ハ推産靈神と有り古事記裏
書ハ引了旧事記ハ伊弉諾尊伊弉冉尊相生火神迦具
突智與土神埴山姫二神相生推産靈神則頭生柔靈
胸中生五穀矣之有ハ然了異本も有しと見えて通本

△神階清知天皇
録子貞觀元年正月
七月後大和國坐向坐
若御魂神位也
有

小異あり皇字ハ奇くしけしども神名式ハ大和国城
上郡卷向坐若御魂神社大日次相之有れハ其御小當
て皇字ハ書る者あり可し偕此御ハ高皇產靈尊神皇
產靈尊の皇ハ同トク物を成す神物ある事云も更
右のニ神を除てハ津速產靈神市十魂命興台產靈
命安年須比命火產靈神何れも美武須毘と
云ふるを此神ハ限り然申せる事ハ右のニ神
の皇產靈ハ天地の全體ハ直りて廣きを此神ハ此
大地上ハ其皇產靈ハ神業を成給ふが故ハ然負坐
者あり記傳五十六ハ知久ハ書紀ハ推字を書り凡て
推を古言ハ知久と云る多し武烈天皇御紀ハ歌ハ思
寐能和俱吾と有ハ鮪若子あり繼體天皇御紀ハ歌ハ

愷那能倭俱吾と有ハ毛野若子あり万葉十四十七ハ
も等能乃和久期と詠り豊宇氣毘賣神の御親ハ坐を
思ハハ既ハ水と土との神等ハ成坐て次ハ穀物の成
へき產靈神あり以上と有り秘訓ハ推產靈傳柯武
説和久產靈然則此文當據也答此又可讀知久但下文
ハ宮注云倭柯故先師相傳知加又古記又得之と有
後ハ然れとも今ハ古事記ハ和久ハ大ハ對へて若と云
とハ異ハて此ハ知久と云ハ其產靈の主意あるハ眼
を著すハ有べうす水と土相清りたる土地を火以て
煮瀾らせハ煮沸て其氣必上ハ騰るむと爲る自然ハ
勢あり然して其火水土の相結ハる時ハ必其地方ハ

因て生出むと爲る物の出来る筈あり和久とい其質を離れて異ある物の成出るを云あり保食神の御祖と坐も其謂ふて其神氣の相感けて出立むと爲る其即稚産霊神の行事あり己の生立る其即保食神の御霊物あり此本末を忘る可くず傳五九丁又七淫土煮尊沙土煮尊と申す神名ハ淫土を煮沙土を煮と云義あるハ其次ハ成坐る角楯尊治楯尊と申すハ植物動物の始あるハ思合せて此の味を曉る可き者あり神と親子の間ハ生靈與衆神中生五穀と有ハ保食此を以て動植共ハ此神の産霊ハ依れる事を知心又己ハ淫土煮尊沙土煮尊角楯尊治楯尊の事ハ此ハ

△神代卷曰詠み稚産霊者草木等衆之元神也と有ハ詠みたり云あり

照應す可き所ハ然レバ和久とい其動植と成べき物の生て出る由あり御ハ火水土の氣相結ハり相感合て成りる精ある事云も更あり下ハ産霊と続く時ハ稚産霊神ハ生結の意あり若御魂神ハ生精結の義あり如此く産霊と御名ハ負坐るを以て大神土神の珍子ハ坐て保食神の御親と在せる尊き大神ハ坐事を曉る可し所以ハ皇御孫尊の御天降の時も高天原より其御霊と爲て子鈴一合を天降給へり明文抄ハ載る大倭本記ハ天皇之始天降未坐之時共副護斎鏡三面子鈴一合也の本注ハ一鏡者云し一鏡者云し一鏡

及子鈴者天皇御食津神朝夕之食向夜護日護齋奉大
神今卷向祀師社所坐拜祭大神也又有八上引了神
名式ある卷向社ある事を知へし猶如此く御靈形を
天降し給へる其正身は高天原に坐す故あり然る
は天香久山は御父軻遇突智神の御骸の化ゆる山を
り此土ある事も埴安の地名有る素より天上あり
は埴安神決く御在る事申も更あり然るを火雷神
の天に坐由山城風土記に見えたり此土に殺され
給ひし火神の正身も共高天原に在るありけり
其は保食神あり然り月夜見尊は被殺給ふ因に
身罷給へども埴津風土記に依り時丹後国に退給

みと見え皇太神宮儀式帳に誓ふる時其あり天宮
に坐して日神は奉り給へり彼御天降の時御靈形
を降賜ふも其正身○頭上を迦斯良と訓む心代の
即天に坐改あり○頭上を迦斯良と訓む心代の
意あり心を迦と云るは田心姫命と云時心凝の
義あり又古事記明宮小伎母年迦布許て袁陀尔迦
詠給へるも心を許して云あり又中心を那加基あり
之時は迦とも許とも云事知へし諸斯良は物を盛る
所あり苗代ありの代も同し和名抄に頭を阿太万と
有る天靈の義ありて靈の頭腦に在る謂あり此人の
迦は上ありむと思ひし今如此く説を成あり○若
云は續きて義を成され今如此く説を成あり○若
ハ卵兒ある可し又万葉十一十二ハ足常母養子眉隱

〇見えたるハ蠶の眉ハ隱ハる事を詠ハル養兒之云
方也ハ可クヤ但古事記高津ハ奴理能美之所養虫
一度為蠶虫一度為穀云々有ハ蠶の事あるハ養ハ
云ハ穀又云を以て其異義ある事の合ハるハ同言ハ成
ル者之所見たり竹取物語ハ卯の事を加比ト云ル
可ハ名義抄ハ蠶字を加比ト古ト有ハ卯見の意あるを
又古賀比ト有ハ兒養あるをも思合ハ可キ者あり
〇桑ハ養葉ある可シ其ハ万葉十二ハ十ハ中ハ二人
跡不在者桑子ル毛成益物字ハ有ハ蠶ハ養兒ハ其
葉を以被養る由の名あるハ思合せて曉ハ可ハ仁徳
天皇御紀ハ天皇浮江幸山背時桑枝沁水而流天皇

視桑枝歌之曰云々于羅愚破能紀ト有ハ麗美ハ末桑
木を兼て詠せ給ハるハ別ハ一種の名ハ非ハ此
此ハ説ハキ事ハ非ハ此トも事の因ハ云ハるハ第十
一ハ書ハの傳ハ蠶をも桑をも説明ハるハ見ハ知ハ
リ〇胸中ハ第十ハ一書ハ腹中生稲ハあり出ハるハ
ハ五穀ト云事古クハ凡神祭詞ハ皇御孫命乃云ハ止
聞食須五穀物字始ハ天下乃公民乃作物字云ハ天下
乃公民乃作物者五穀字始ハ草乃片葉ハ至万代ト
有ハ然ハ天下公民の作ハ作物の中ハ五種を
細出テ殊ハ五穀ト云ハ其ハ古ハるハ事ハ聞
えたるあり西戎ハ五穀ト云名目ハ有ハ依ハ其
を取ハるハ先ハ思ハ

礼記月令の黍稷麻豆麥を云申見え賀茂翁説小右
の五穀物古事記小速須佐之男命乃殺大宜津比賣
神故所殺神於身生物者於頭生蠶於二目生稻種於二
耳生粟於鼻生小豆於陰生麥於尻生大豆之有是五
穀ありと云わたり是は稻粟小豆麥大豆を合せ其
出来始り所由小依て然計はれり此事灼然此
小も第十一書あり右と同下傳を保食神と有て願
上生粟眉上生生蠶眼中生稗腹中生稻陰生麥及大豆
小豆之有り此は粟稗稻麥大豆小豆と六種あり也
大豆小豆三種あり此傳あり不可

釋今ハ餘小作さる者あり也
名今見餘小作さる者あり也
漆下郡攝津国西成郡あり
水田あり多し釋を作地あり故の各ありを以古
け此物多し在り○右の此神頭上生蠶與桑胸中生五
穀と有ハ右の古事記の大宜津比賣神の於頭生蠶云
此の保食神の眉生蠶云ハ腹中生稻云ハあり
有る混れたりありむと思ひしとも猶考るハ
此ハ保食神の生坐一傳の省りて傳はりたる者あり
旧事紀の陰陽本紀ハ全ク此一書の文を擧あぐ次
ある神祇本紀ハ至て再此文を出せる其細書ハ蓋保
食神歟有ハ苦しげある記ハ様あり其ハ古事記ハ
何れハ作者の情進と見え打合ハ難ハ古事記ハ
次和久産巢日神此神之子謂豊宇氣毘賣神と有る信

然有へき傳ある者あり然れ此も古傳あり生推
産靈推産靈生保食神此神頭上生靈共桑臍中生五穀
之有て茅十一一書小巨細小記さる可き事の大較先
此の出なりけむを何れして傳へ漏して今も如く
成りるを旧事紀の何の意も無く其任の出し
出したれども推産靈神も然有る事の保食神の
其より詳ある氣押ナカサにて終ふ蓋保食神歟と註す
迄ふに至りけり然れども古事記の此の軋遇
突智娶埴山姫と云ふ大切に傳を漏せざるを此御紀
推産靈神の出自の知りたるあり甚く辱き賜物

あむ有ける古事記の於尿成神各波迹夜須昆古神
能賣神次和久産巢日神と有れども土神の昆古神
の在さる事上云ふ如くあれ誤あり若て
尿於尿と上あり其出自を云て和久産巢日神の如く
の由縁と上あり其出自を云て和久産巢日神の如く
傳傳たり御鎮座本記和久産巢日神子豊宇可能賣
命屋船福生五穀而善釀酒奉御饗養と有て全く古事記
小合る者あり御鎮座傳記の其傳を載たる小豊宇
氣姫命福靈見え御鎮座本縁の止由受此女是也
之有り然れども其小伊弉諾伊弉册尊所生之見
傳あり偽造れり外宮の神を天御中尊或ハ国常立
へ諸推産靈神の上の記せる如く物の芽多き事

御功坐る神ハ坐を豊宇氣毘賣神ハ其御祖神の御靈
を受保ち給ひて草木ハ在れ木ハ在れ其形質を備へ現
伸出る御靈の大神ハ坐り然れハ火産靈神埴山媛神
二柱相結ハ一ハ中より生出る物皆ハも雅産靈
神ハ始り保食神ハ成りる者あり是を以て斯計り尊
子保食神の傳の漏たる事の甚不足あり所思ると
云るあり抑此保食神ハも天照太神の御食津神と
坐て伊勢の度會宮ハ持斎れ御在り坐す止由氣大神
小渡りせ給ふ者を御紀りハ其成坐る傳無く又其御
靈の鎮坐す傳ありも漏されたるハ皇統ハ係りる御

事ハ耳力を入りぬたる故ハも有べけれどハも餘り
事略ハ所思りハ也ハ第六一書ハ凡神の次ハ又飢時生
事記ハ同下ハ二神の御子と云傳ありハ誤あり上ハ
古事記ハ依り須佐之男神ハ津見神の御女ハ神大市
此賣命ハ御合坐て字如之御魂神を生坐りハ倉稲魂
命と云名も其ハ誤あり事其傳ハ云を見り知べし
豊宇氣毘賣神の豊ハ動りて大地の天日の大御荒ハ
牽りて自動ハつて回るハ依りて草木暢茂ハ万物の生
るを以称ふる由傳 三ハ廿九丁傳四ハ三ハ云るハ如
今も此神ハ負坐り意ハ火神ハ神工神の御結ハ依りてハ
萌出る草木の全ハも此神の恩頼ありハ寔ハ小諾あり
御事あり宇氣ハ第十一書ハ保食神此云宇氣母

知能加微^{和名抄引}と有^{和名抄引}を私記^{和名抄引}の宇氣者食之義也^{是保持食物}
之神也と有^{和名抄引}れども猶盡さず宇氣^{ウムケ}の生毛^{ウムケ}めて木を生
し草を生し給ひて食物とし着物とし住宅と爲る事
小幸給ふ意の御名あり有^{和名抄引}れども其の中あり殊^{和名抄引}の甚
しく止事無き物ハ食物ある故ハ其食物の名の如く
ハ成れる者あり此事祝詞講義^{大御巫神詞大忌祭詞}
條ハ委しく云^{和名抄引}り神名式ハ伊勢國度會郡度會宮四座
相殿坐^{神三座}並大月次新嘗^有ハ此大神ハ坐事誰も知^{和名抄引}る如
く御靈形ハ倭姬命世記^{和名抄引}ハ眞經津鏡座圓鏡也と見え
たり此ハ大倭本記ハ一鏡及子鈴者天皇御食津神朝

夕之食向夜護日護斎奉大神今卷向穴師社所坐并奉
大神也と有^{和名抄引}ハ此大神の親子ニ柱のを一ハ云^{和名抄引}る如て
子鈴ハ卷向坐若御魂神社の御如て一鏡ハ其度會宮
の御正體^{和名抄引}めて天より降給へる齋鏡三面の一あり事
予詳^{和名抄引}ハ此を知て祝詞講義ハ已ハ註せるを猶傳^{和名抄引}あり
天孫降臨章第二ノ一書齋庭之穗の下ハ云^{和名抄引}べし此大神
座の御事^{和名抄引}ハ就てハ容易く説盡す可^{和名抄引}き事ありぬを此
ハ其御名の出る因^{和名抄引}ハ云^{和名抄引}ずしてハ其意を難得^{和名抄引}けりハ
今茲^{和名抄引}ハ○大宜都比賣神と申す御名坐り古事記ハ火
之燒連男神より以前ハ成坐^{和名抄引}る神と次第たるハ亦名
の別神の如く傳^{和名抄引}ハ此者あり又粟國謂^{和名抄引}大宜都比賣

と有ハ其生坐る国あとの由ハ依テ亦名々ハ成收る
ある可ハ仙覺ガ万葉抄五ハ阿波国風土記の如クハ
空ノ降下りたる山の大あるハ阿波国ハ降下りた
るを天詔戸山々云ハ其山の碎けて大和国ハ降著た
るを天香山々云とある申すト見えたる其天香山ハ
御祖父と坐す火神の御歌より化れる山あり其も
申有（之神名ハ美馬郡波加移麻比弥神社有ハ其御祖母ハ坐す又由緒有あり）今も其国ハ大宜山々云有り又大宜都比賣
神社々云有ハ神體ハ女神の左社あるガ右手ハ杓子
を持給へる御像あるをも思ふ可ク又高橋氏文ハ上
總国安房大神乎御食都神止坐奉天々有ハ本國あり

移奉收る由傳六ハ十々云るか如ク又那賀郡ハ和射
郷有を神名式ハ和邪神社和奈佐意富曾神社有ハ丹
後風土記ハ打合るあり悉く思合す可き事少くず
然るハ此第十一書（ある保食神）の事を彼記ハ大宜津比賣神
と傳たるも素より同神ハ坐ガ故ある事上ハ其文を
引テ照一合せたるガ如ク記傳六三五下ハ御食津神と
云るハ正しく此と同名あり凡て大御とも大とも御
とも云皆同意あり神祇官坐御巫祭神八座の中ハ御
食津神を祈年祭詞ハ大御膳都神と云りと有ハ然
る言あり但文徳天皇実録ニハ河内国恩智大御食津
彦命神恩智大御食津姫命神と有ハ高安郡

今武天皇御紀
名爲藏福魂
有之注小福魂
此云于能能送
見内此神



恩智神社二座並名神大月次相嘗新嘗之有日社の祭
 神あるを引出し此の天兒屋命の裔ある
 大御食津臣命夫妻の同名あり○神名式大知
 此大宜都比賣命の別神あり
 国廣瀨郡廣瀨坐和加字加賣命神社名神大月
 其神の祝詞に御膳持須若字加能賣命登御名者白
 氏之有り御膳持須之有ハ彼保持食物之云義あり若
 ハ雜産靈の雜と同トく草木の芽祭ヲ謂あり字加ハ
 字氣の同ト文徳天皇実録ハ嘉祥三年七月丙子朔丙
 戌大知国若字加乃賣命神加後五位上仁壽二年七月
 庚寅大知国若字賀乃命神加後四位下同年十月癸亥
 朔甲子大知国若字賀乃賣命神加後三位之見元たり



